

「堀江節郎神父の講演」

2017年11月14日

ブラジルで宣教師として司牧（牧会）しておられる堀江節郎神父が一時帰国をされ、11日（土）にイグナチオ教会のヨセフホールで講演されると聞き、早速出かけた。横浜港南台教会の牧師館で夕食を共にしてから、十数年ぶりの再会で、懐かしく嬉しかった。少しスマートになられたようだが、変わらぬご様子に接することができた。

小井沼國光・眞樹子ご夫妻は商社マンとしてサンパウロに駐在中に、神父と出會われ、その信仰と人柄に敬服されていた。そのことがきっかけで、神父が帰国された時、横浜港南台教会で説教していただき、神父と交わりを持つようになった。小井沼ご夫妻は牧師になり、宣教師としてサンパウロ福音教会に赴任された。私は、小井沼師夫妻を訪ね、ブラジルに1ヶ月ほど滞在する機会を得た。その時、神父の司牧するマナウスに行き、神父の働きをつぶさに見て、深い感銘を受けた。その時の報告を週報の「牧師室から」に下記のように書いた。

（前略）私たちの教会で説教をして下さいました。「失われた一人を訪ね、共にあることが主イエスの道に従うことではないか」という感銘深い説教でした。その説教を聴いて、神父の司牧（牧会）に触れてみたいと願っていましたが、今回それが果たされました。アマゾン河沿いのマナウスで、神学生の霊的指導をしながら、教会に仕えておられます。

神父に案内されて、病気で礼拝に来られない一人一人、またハンセン病者を訪ね、ミサ（聖餐式）をし、神の祝福を祈る場に招かれました。言葉を超える貧しさの中にある彼らは、神父の訪問を通して与えられる神の祝福に涙を流して喜んでいました。説教で語られたように、失われた羊を探し求める主イエスの姿を彷彿とさせられました。神父の主イエスに倣おうとする信仰と生活から生まれる清潔で優しい人柄は人々から深い信頼と尊敬を集めています。眞樹子師は「歩く聖フランシスコ」と評されますが、頷けます。

ブラジルの大地は虐殺された先住民・インディオの血と、奴隷として酷使されたアフリカ黒人の血と汗が染み込んでいます。この残酷な歴史が自分自身を含め人間を大切にしない土壌を培養しているように思われます。神父はこの民衆の悲しみを身に染みて感じておられます。（中略）堀江神父や小井沼師ご夫妻がブラジル宣教に携わっていることは誇らしいことで、これに関わる光栄に与りたいと思いました。

今回の講演は、「アマゾンの森の心に寄り添って」と題して話された。現在、ブラジルの北、ベネズエラの国境に接するロライマ州の、先住民のインディオが暮らしている集落で宣教活動をしている。「森の心」とは「インディオの心」であるということから話し始めた。外国の大企業がアマゾンの土地を買収し、広大な土地に単一栽培によって、豊富な生物の多様性が失われている。地球の25%を保水する森林が伐採され、自然環境の破壊によって、地球規模でエコロジーが脅威に曝されている。また、様々な鉱石採掘によって公害が起こっている。消費主義的な経済機構が自然だけでなく、自然と共生してきたインディオの歴史的、文化的遺産も破壊しつつある危機について話された。第二は、インディオ ミッション（宣教）の基本姿勢について話された。インディオたちを単にキリスト教化するのではなく、彼らの命の十全な実現のために、福音的、社会的、政治的あらゆる次元から、自立、進歩、充実した生活ができるように奉仕している。かつてのような押しつけではなく、彼らの命と文化を共に分かち合う宣教である。貧しい人々と共に生きる「解放の神学」を実践していると言われた。第三は、インディオ文化の尊重を力説された。文化の継承は言語にあると言い、彼らの言葉の豊かさを守る大切さを言われた。ブラジルでは、インディオは蔑まれているが、彼らの中では話し合いで決めていく直接民主主義が生きており、苦しみを共有する素晴らしい文化が息づいている。最後のテーマは、ウランの採掘に関して、反対する2,000人が虐殺された事件があったが、公にされていない。そして、そのウランは福島原発で使用された。二つの命は世界中の人々の命とつながっている。貧しい者を痛めつけることから、主イエスの福音に従い、命をつなぐ優しさと気遣いの必要性を強く訴えられた。